

アムスルだより

No.22 1996年11月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



アオリイカは3種類いるの？

これから冬にかけてイカ釣りの季節ですね。夜の海、サンゴ礁のリーフ沿いをゆっくりと走る舟をときどき見かけます。これは舟で疑似餌を曳きながら、刺身にしてとても美味しいアカイカ、シロイカ、クアイカを狙っているそうです。沖縄では昔からこれら3つのイカを、色や大きさ、肉質や味が違うことで分けていましたが、和名では全部まとめてアオリイカと呼んでいます。しかし、これらはその生態や行動、卵塊の様子などが異なることから、沖縄の人たちが言うように、別々の種ではないかということで研究が進められています。

このうち、アカイカは最も大きくなるタイプで体長50cm以上になるものもあり、主に外海で生活しているようです。時折、阿嘉港内で見かける黒っぽいのはクアイカで、3つのタイプの中では最も小さく、最大でも20cm程にしかありません。

クアイカの産卵期は、3~11月で、7~8月にピークをむかえます。アカイカが20m以深の深場に産卵するのに対して、クアイカはかなり浅いところを産卵場とします。先日、研究所を訪れたアオリイカの研究者と一緒にクシバルやニシハマで調査したところ、水深5~6m、時には、干潮時にひざ下ほどになるところからクアイカの卵塊が見つかりました。

アオリイカの卵塊はサヤインゲンのような形をしており、卵が白いゼリー質の袋に包まれています。卵塊の中に入っている卵の数はタイプによって異なり、アカイカは5~13個で平均9個の卵が、シロイカは平均6個の卵が連なっています。しかし、クアイカはずっと少なく、卵塊には2個の卵しか入ってません。また、アカイカやシロイカの卵を包むゼリー質の袋は丈夫なものです。クアイカの袋はやや薄く、魚たちに簡単に食べられてしまいます。そのためでしょうか、他の2タイプのアオリイカが、海藻や枝サンゴのすき間に卵を産み付けるのに対して、クアイカの卵は、台風などでひっくり返った直径40cmほどのテーブルサンゴのがれきの下に産み付けられていました。この場所はイカの足は入るけど、卵を

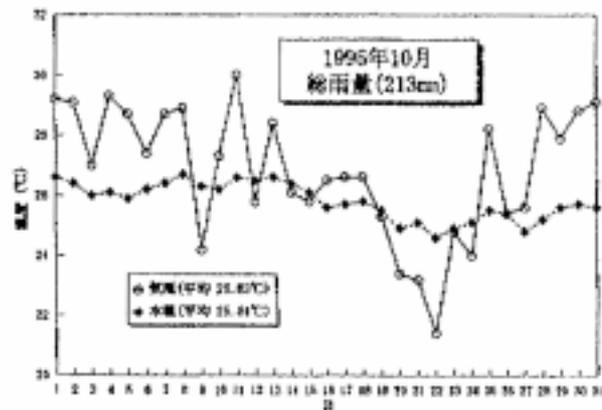
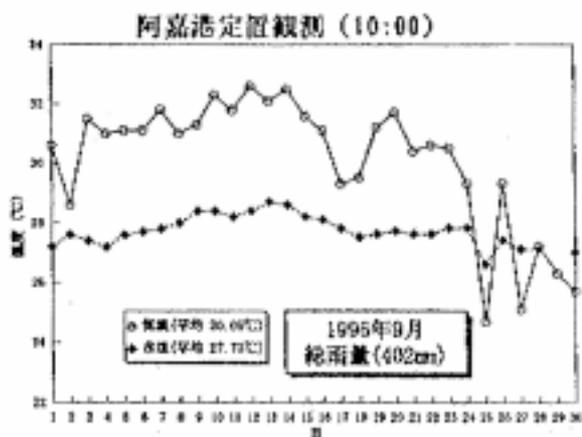
襲う魚は入り込めないのです、クアイカの産卵には好都合なのでしょう。前回のアムスルだよりで、台風の後、大きなテーブルサンゴがいくつもひっくり返っていたという話をしましたが、クアイカはこの死んだサンゴを上手に利用しているのです。

産み付けられた卵は、水温 25 度は 25 日くらいでフ化します。採集した卵塊の中にはフ化直前のものもあり、移動のショックや水温の差にびっくりしたのでしょうか、研究所の水槽に入ると、まもなく卵の中から元気よく飛び出してくるものもいました。生まれたての子どもは親とそっくりな姿ですが、大きさは 1 cm ほどしかなく、かわいらしいものです。海の中で生まれた子どもの多くは、きっと魚たちの餌になってしまうのでしょうか。フ化直後は、最も危険な時です。卵から出てきた子どもは、自分と同じくらいの墨を吐いて、相手の注意が墨にあるうちに急いで泳ぎ去るそうです。これは、危険の多い自然の中で、少しでも生き残るために備わった知恵の一つなのでしょう。

阿嘉島の海より

-ヤシガニがいた！-

10 月 30 日の夜、ニシハマでキャンプをしていた人たちが、人の頭ほどもある巨大なヤシガニを見つけて、研究所に知らせてくれました。地元の人によると昔はよく見られたそうですが、今ではめったに見られません。このヤシガニは、しばらく研究所で飼育・観察した後逃がしてあげますので、興味のある方は是非見に来て下さい。



-サンゴ礁観察会-

10 月 25 日の午後、阿嘉小学校の子供たち 18 名はクシバルでサンゴ礁の観察会を行いました。まず、皆で砂浜にころがっている石を集めて分類し、サンゴ礁はいろいろな種類のサンゴの骨でできていることを学びました。そして、潮が引いたサンゴ礁を歩いて、これらのサンゴがどこに生えているのか、そこにはどんな生き物が住んでいるのかを調べました。さらに高学年の子供たちは、水中メガネを付けてサンゴ礁の縁の深くなった所を泳ぎ、テーブルサンゴがびっしり生えた美しい水中景観に感嘆していました。これらの体験をもとに、私たちが住む美しいサンゴ礁の海を末永く守り継いでほしいと思います。